

鬼ごっこ・隠れんぼにおける 「わざと捕まる」違反行動の発達の残存性

加用 文男

Developmental persistence of rule violations -such as
"intentionally getting caught"- in playing tag & hide-and-seek

Fumio KAYO

Accepted June 28, 2011

抄録: 保育士 581 名を対象とした質問紙法によって、5, 6 歳児の鬼ごっこや隠れんぼにおいて「わざと捕まる」ような違反行動について調査を行った。彼らによれば年長 5 歳児においてもこのような違反行動は日常的なものであるという。この結果について、以下の二つの仮説の元で考察が行なわれた。第 1 の仮説は「オニ」の魅力仮説であり、第 2 の仮説は残存性仮説である。残存性仮説とは、乳児期や 1, 2 歳児期において見られ経験される追う-追われる行動あるいは隠れ-探す行動のような情動的相補的關係（感情交流的対立）が 5, 6 歳児期にも残存しているというものである。

索引語: 鬼ごっこ, 隠れんぼ, ルール違反, 情動的相補的關係, 5 歳児

Abstract: Five hundred and eighty one nursery teachers were asked to answer a questionnaire about the violation of play rules -such as "intentionally getting caught"- by 5-6 year old children in playing tag and hide-and-seek. According to their answers, such behavior is, even for the older 5 year olds, an everyday occurrence. The results were discussed in the light of two hypotheses. One concerns the attractiveness of the "It" role; and the other concerns the persistence hypothesis wherein the emotional underpinnings of emotionally reciprocal relationships seen or experienced in early infancy or toddlers - as activities such as chasing-and-being chased or hiding-and-searching- persist in 5-6 year old children.

Key Words: tag, hide-and-seek, violation of play rules, emotionally reciprocal relations, five year olds

1. はじめに

鬼ごっこや隠れんぼは一般にはルールのある遊びの一種と見なされている。この種の遊びの本質をルールの存在にみる考え方は Piaget あるいは Vygotsky といった古典的発達理論家たちに共通するもので、発達観の相違を超えた共通見解となっている。幼児の心性の特徴を自己中心性にみた Piaget

(1930,145) からすれば発達は社会的なルールに従うことができない段階からそれが可能となる段階への移行とも考えられ、そういう視点からすればルールからの逸脱や違反は幼児前期から後期そして学童期にかけて単純に減少していくものとされる。Vygotsky (1933) や彼の弟子に当たる E'likonin (1960) たちにとっては、幼児の遊びはまずはままごとやお店屋さんごっこなどに代表されるごっこ遊び（虚構的場面の創造が前面に出た遊び）の形を取り、この遊びの中で子どもたちは役のイメージに沿った規則に従って行動することを学び、その後にルール遊びが出現するとされる。理由付けは異なっても、ここでもやはりルールからの逸脱や違反は幼児期の間に単純減少していき幼児後期から学童期になれば消滅していくものであるかのような考え方がとられている。

ルールのある遊びの本質を、ルールとその遵守にというよりも参加者たちの間に成立する役割上の対立関係（オニとコ、攻撃陣と守備陣など）に求める考え方を導くことになる先駆的な研究を行ったのは河崎他（1979）であった。彼らは保育所などでの遊びの観察に基づいて幼児の遊びのルールの分類を行ったのであるが、その際に目標水準という概念を導入した。第一の水準はオニとコの目標関係が1対1であるもの（高鬼など）、第二の水準は1対集団であるもの（溜鬼、隠れんぼなど）、そして第三水準が集団対集団であるもの（泥警、ドッチボールなど）とされた。その後神田（1991）の指摘などによって、この水準分けが必ずしも遊びの発達段階や難易度を表すわけではないことも明らかにされるに至ったが、この種の遊びを対立関係を楽しむ遊び（河崎, 1984; 加用, 1991）としてとらえることになる契機を作った先駆的なものであった。

目標水準の考え方から示唆を得ながら、遊びのルールの構造を目標規定的要素と制限的要素に分ける必要性を論じたのは加用他（1981）である。彼らはおもに年長5歳児に焦点を当てながらルール遊び中の違反・逸脱・インチキの事例を収集して分析した結果、明らかにルールの無理解に基づくと思われる違反は全体の1割程度であり意外に少なく、ほとんどが理解がありながらのものであり、さらに後者の違反を分類しようとするとルールそのものを目標規定的要素と制限的要素に区別しなければならなくなるとして、この区別に基づく違反の分類を試みている。たとえば高鬼でならオニはコを捕まえようとし、コはオニに捕まらないようにするのが目標規定的要素であり、コが高いところに逃げたら捕まえられないとか、捕まったらコはオニに交替しなければならないなどがルールに含まれる制限的要素である。この区別に対応して、実際の遊びの進行過程では、タッチで捕まってもオニなろうとせず逃げていくような違反（制限的要素からの逸脱）だけでなく、勝手に遊びから抜けたり、わざと捕まろうとするなどの違反（目標規定的要素からの逸脱）も多数見られている。子どもたちが役割上の対立関係を楽しむその様態は多様なのである。

以上のような研究経過から、従来ルールのある遊びとされてきたものは、その遊びの面白さの本質論からすれば、対立関係を楽しむ遊びとしてとらえ直されるべきものと思われるが、この観点に立った分析資料の収集はまだまだ今後の課題である。本研究はこのような課題意識の元、①幼児の鬼ごっこや隠れんぼにおいて見られる「わざと捕まる」という特異な違反に着目し、これが年少児に特徴的なものであって年長児になれば単純減少していくのか、それとも年長児にも残存し続ける傾向を有するものであるかどうかを検討することである。先の加用他（1981）においては年長5歳児でも見られているがこれは組織的な調査に基づくものとは言えないので組織的な調査を行いたい。②その上で、もしもこの種の違反が幼児期の間に単純減少していくのではなく年長5歳児にも残存する傾向を持つものであるとされるなら、このことの持つ意味は何であるのか、関連する他の研究から得られている知見と合わせて検討し、この種の遊びの面白さの内実へと迫る考察を試みたい。

このような目的での調査方法としては観察法、実験的方法、その他の方法が考えられる。しかし、たとえば観察法では加用他(1981)がそうであったように、限られた時間内でのものとならざるを得ないために日常の生起実態を反映したデータ収集を行うことは困難である。実験的方法はデータの精度の点から言うと申し分ないが、対象が遊びであり、しかもその中での違反行動を特に問題にしようとしている点から言うと信頼できるデータを得られるかどうかは疑問であろう。なぜならたとえばSaarni(1984)が開発した「望まない贈り物」実験のパラダイムを幼児版として施行したCole(1986)の研究などが示しているように、幼児でも感情表出における表示規則(display rule)による抑制作用が起こりうるのである。つまり実験的状况では5, 6歳児たちが違反行動の表出を抑制してしまう可能性が考えられるのである。従って本研究ではその他として間接的調査法、該当行動の日常的な生起に関して最も熟知性が高いと考えられる集団に対する意識調査の方法を採用することとした。該当行動観察者調査法である。こういう方法はたとえばLieberman(1977)が幼児の日常生活行動にみられる創造性と遊びの関連性を調べるためにデイケアセンターの教師を対象に調査を行っていたり、幼児における「想像上の友達」問題でTaylor et al.(1993)が母親への調査を利用したり、母子間での「抱き」問題で西條(2004)が同じく母親に対する実態調査を行ったり、幼児における人称代名詞の利用方法について家庭での実態を知るために母親を対象に調査を行っている西川(2003)の研究など多数の先行的な研究例を挙げることが出来るが、本研究では対象者として保育士を選んだ。幼児の集団遊びの実態に関わる問題であることから彼らこそが対象者として最もふさわしいと考えられたからである。

2. 方法

<調査対象>

保育士を対象としたアンケート調査。時期は2005年5月から7月。各地の保育士会あるいは社会福祉協議会などが主催する保育士の研修会(内容は本調査とは無関係)の場での配布なので回収率はほぼ100%である。総回収枚数は581(京都60, 大阪183, 山口県338)である。

<アンケート内容>

アンケートの内容は、前文として「この調査は、幼児にとって鬼ごっこや隠れんぼがどういう遊びであるかを知るために行われているものです。保育の実態調査というわけではありませんので、お気軽にお答え下さい」を添えて、無記名で、経験年数、担任するクラス(「フリー」、「混合クラス」カテゴリーを含む)を尋ねた上で、①担任クラスで鬼ごっこや隠れんぼを保育内容として取り上げているかどうか(「はい」「いいえ」のいずれかを選ぶ保育内容質問)、②取り上げている場合には鬼ごっこについては「担任しているクラスで鬼ごっこをする場合、子どもがオニに『タッチしてー』と(あるいはそう言わんばかりに手を出して)わざと捕まろうとすること」があるかどうか、隠れんぼについては「担任しているクラスで隠れんぼをする場合、隠れていた子どもがオニの前に『ばあ』と出て(あるいはそう言わんばかりに顔を出して)わざと見つかりとうとすること」があるかどうか(「よくある」「たまにある」「ない」「わからない」のいずれかを選ぶ各クラス質問)、および③「担任しているクラスとは関係なく」先のような行動が「5歳児クラスの子どもたちにも見られると思うかどうか」(「よくある」「たまにある」「ない」のいずれかを選ぶ5歳児クラス質問)を行った。質問③はたとえ現在の

担任クラスが 5 歳児でなくともこれまでの保育経験やあるいは今や常態化してきている朝夕の合同保育時の経験から十分に回答可能であろうと考えられたので追加されたものである。

以下の集計および統計処理は主に R.2.12.0 によっているが、対数線型モデルに関しては LEM を使用した。

3. 結果

対象者は 3 府県に渡っているが人数のばらつきが大きいのでこみにした分析を行った。経験年数の平均値は 14.85（経験年数質問への回答者総数は $n=526$, $\text{range}=0 \sim 45$, $\text{SD}=10.24$ ）であった。以下の分析で各クラス担任の分類に当たっては、0, 1, 2 歳児の乳児クラスでは混合クラスの担任も多いのでそれも含めて「乳児クラス」とし、本調査の主たる対象者である幼児の「3 歳児クラス」, 「4 歳児クラス」, 「5 歳児クラス」の担任を区別し、それ以外として幼児の混合クラス担任やフリーな立場のフリー担任、主任、園長などを「フリー担任」としてまとめることとした（以下の表などにおいて総人数が 581 に満たない場合があるのは記載漏れなどによる欠損値のためである）。

①保育内容質問への回答

表 (1) よりどの年齢でも鬼ごっこや隠れんぼが保育内容として多く取り組まれている傾向が読み取れるが、乳児クラスでも取り上げているという回答（鬼ごっこで 37%, 隠れんぼで 44%）が見られる。これは質問紙の余白に「ほんとうの鬼ごっこというよりはマテマテ遊びに近いもの」とか「いないいないばあに近いもの」という趣旨の補足的な記述が多く見られたことから分かるように鬼ごっこや隠れんぼについての拡大解釈の結果と考えられる。

表1 保育内容質問への各担当クラスの回答（人数）					
鬼ごっこ	乳児クラス	3歳クラス	4歳クラス	5歳クラス	フリー担任
はい	83	50	59	67	27
いいえ	142	15	2	0	3
隠れんぼ					
はい	100	45	52	60	24
いいえ	125	20	9	7	6

②各クラスでの違反の生起を問う各クラス質問への回答

担任しているクラスで、鬼ごっこにおいて「子どもがオニに『タッチしてー』と（あるいはそう言わんばかりに手を出して）わざと捕まろうとすること」があるかどうかという質問に対する回答は、隠れんぼにおいて、隠れていた子どもがオニの前に『ばあ』と出て（あるいはそう言わんばかりに顔を出して）わざと見つかりようとする」とあるかどうかという質問への回答とともに表 (2) に示してある。ただし、ここでは乳児クラス担任や、どの年齢クラスの子どもたちについての回答であるのかを判断できないフリー担任の回答は除いて幼児クラス（3, 4, 5 歳児クラス）の担任の回答のみを取り

出している。また幼児クラスの担任であっても、保育内容質問で鬼ごっこと隠れんぼそれぞれに対して取り組みがないと答えた回答者のものも省いている。

表2 違反の生起を問う各クラス質問への回答（人数）							
鬼ごっこ	3歳クラス	4歳クラス	5歳クラス	隠れんぼ	3歳クラス	4歳クラス	5歳クラス
よくある	19	24	26		14	8	13
たまにある	24	32	36		25	35	36
ない	6	3	5		6	8	11
分からない	1	0	0		0	0	0

表（2）より、鬼ごっこ、隠れんぼいずれにおいても「わからない」という回答はごく少数（1例のみ）であるのでこれを省いて「よくある」「たまにある」「ない」の3カテゴリーに関して年齢差があるかどうかを見るためにフィッシャーの直接法による検定を行った（期待度数が小さいセルが多いので χ^2 検定は不可）が有意差は認められない（鬼ごっこ $p=0.7633$ 、隠れんぼ $p=0.4687$ ）。

さらに念のために各違反行動が「よくある」に2、「たまにある」に1、「ない」に0を当てて鬼ごっこの場合と隠れんぼの場合各々について一元配置の分散分析を行った結果も同様であり、いずれも担任クラス差は有意ではなかった（鬼ごっこ： $F(2/172)=0.3748$, $p=0.69$ ；隠れんぼ： $F(2/153)=1.1085$, $p=0.33$ ）。従って、常識的な予測に反して、鬼ごっこでわざと捕まろうとする違反、隠れんぼでわざと見つかるようとする違反は3歳、4歳、5歳と年齢を重ねていくにつれて減少していくというわけではないようである。年長5歳児クラスにおいても日常茶飯事であるらしいという結果である。

以上鬼ごっこ、隠れんぼそれぞれについて分析してきたが表（2）より両者の間でも違いが見られるようであるし、また順序尺度であるものに間隔尺度的な得点を与えて施行した分散分析の問題性も考慮して、別のやり方で総合的な傾向を読み取るためにA：遊びのタイプ（鬼ごっこ、隠れんぼ）×B：年齢（3、4、5歳）×C：反応カテゴリ（「よくある」、「たまにある」、「ない」）の3重クロス表に対する対数線型モデル分析を行った。表（3）に各モデル毎の情報基準値の計算結果を示してある。

表3 各クラスでの違反に関する対数線型モデル：各モデルでの情報基準値									
	[ABC]	[AB][BC][AC]	[AB][AC]	[AB][BC]	[AC][BC]	[AB][C]	[AC][B]	[BC][A]	[A][B][C]
G2	0	3.7124	5.5252	17.2302	3.8163	18.9865	5.5726	17.2776	19.0339
BIC	0	-19.4961	-40.8918	-17.5825	-30.9964	-39.0347	-52.4486	-29.1393	-50.5915
AIC	0	-4.2876	-10.4748	5.2302	-8.1837	-1.0135	-14.4274	1.2776	-4.9661

表（3）によって明らかなように、1変数独立モデル[AC][B]が最もふさわしいモデルと考えられる。このことからB：年齢（3、4、5歳）要因の独立性すなわち年齢による違いの無さが示されている。これは個別に施行した直接法の結果や分散分析の結果とも一致している。連関要因として取り出されているA：遊びのタイプ（鬼ごっこ、隠れんぼ）×C：反応カテゴリ（「よくある」、「たまにある」、「ない」）に関するパラメータ推定値のZ得点（標準効果得点）を示したのが表（4）である。これによると、わざと捕まろうとする違反行動は隠れんぼよりも鬼ごっこにおいてより見られやすいという傾向が示されている。対数線型モデルは3重クロス以上になるとモデル選択に唯一の絶対的な基準がないという限界がある方法であるが、他の分析を補足する手段としては十分有効であろう。

表 4 A:遊びのタイプ×C:反応カテゴリーでのパラメータ推定値のZ得点 (SPE) * < .05 ** < .01					
鬼ごっこ・よくある	鬼ごっこ・たまに	鬼ごっこ・ない	隠れんぼ・よくある	隠れんぼ・たまに	隠れんぼ・ない
3.585**	-0.376	-2.515*	-3.585**	0.376	2.514*

③ 5 歳児クラスでの違反の生起を問う 5 歳児クラス質問への回答

次に、現在担任しているクラスの子どもたちについての質問ではなく、年長 5 歳児について質問した結果は、乳児クラスの担任も、またフリー担任の結果も含めて表 (5) に示してある。

表 5 5歳児クラスでの違反についての回答 (人数)					
鬼ごっこ	乳児クラス	3歳クラス	4歳クラス	5歳クラス	フリー担任
よくある	60	15	13	22	45
たまにある	137	41	39	44	82
ない	24	10	7	1	4
隠れんぼ					
よくある	26	6	4	14	16
たまにある	124	36	37	44	89
ない	70	24	12	7	27

鬼ごっこに関して χ^2 検定を行った結果有意差 ($X^2(8, N=544)=18.1918, p<.02$) が見られた。残差分析の結果 (表 6), 「ない」という回答に関して、相対的に 3 歳児クラス担任でその傾向が大きく (5% 水準), 5 歳児クラス, フリー担任では逆にその傾向が小さかった (それぞれ 5%, 1% 水準)。

隠れんぼでも χ^2 検定を行った結果有意差 ($X^2(8, N=536)=22.4055, p<.005$) が見られた。残差分析では、乳児の担任で「たまにある」が少なく「ない」が多い傾向 (いずれも 5% 水準), 3 歳児クラス担任で「ない」が多い傾向 (5% 水準), 5 歳児クラス担任で「よくある」が多く「ない」が少ない傾向 (それぞれ 5%, 1% 水準) という結果が得られている (表 6)。

表 6 5歳児クラスでの違反: 残差分析 * < .05 ** < .01					
鬼ごっこ	乳児クラス	3歳クラス	4歳クラス	5歳クラス	フリー担任
よくある	-0.574	-1.107	-1.164	0.841	1.705
たまにある	-0.424	-0.167	0.514	0.475	-0.124
ない	1.667	2.086 *	0.997	-2.188 *	-2.551 **
隠れんぼ					
よくある	-0.291	-0.850	-1.112	2.415 *	-0.077
たまにある	-2.066 *	-1.252	1.300	1.083	1.593
ない	2.506 *	2.023 *	-0.607	-3.005 **	-1.707

従って、鬼ごっこ、隠れんぼ、いずれにおいても、年長 5 歳児クラスの子どもたちのわざと捕まる

違反、わざと見つかる違反の生起頻度について、乳児クラスや3歳児クラスの担任よりも、ふだん5歳児クラスの子どもたちに接することの多い5歳児クラス担任やフリー担任の方が「よくある」「たまにある」と見なす傾向が強いということである。したがって、ここでもまたこのような違反が年長5歳児クラスにおいて日常茶飯事な現象であることが示されていると言えよう。年長5歳児の担任でこのような違反が「ない」と返答した人は鬼ごっこで有効回答者67名中1名にすぎず、隠れんぼでは65名中7名にすぎなかった。

χ^2 検定による分析では鬼ごっこの場合と隠れんぼの場合を個別に扱わざるを得なかったが、交互作用もあり得るので②の場合と同様に各違反行動が「よくある」に2点、「たまにある」に1点、「ない」に0点を与えて、今回は対象者が先行質問によって抽出されておらず同一であり従って2元配置が可能なので、被験者間要因を担任クラス(5)被験者内要因を遊びのタイプ(鬼ごっこと隠れんぼ)(2)として分散分析を施行した結果、交互作用は有意ではなかったが、担任クラス($F(4/527)=4.82$ $p<.001$), 遊びのタイプ($F(1/527)=112.62$ $p<.001$) いずれの主効果も有意であった。担任クラスに関して Shaffer (Modified Sequentially Rejective Bonferroni) による多重比較を行った結果、乳児クラスと5歳児クラス($p<.05$), 3歳児クラスと5歳児クラス($p<.05$), 3歳児クラスとフリー担任($p<.05$)の間で有意差が認められた。隠れんぼよりも鬼ごっこで違反行動が見られやすいと同時に、鬼ごっこにしる隠れんぼにしる5歳児クラスの担任の得点が高く違反行動が多いという判断を示しやすいことが分かる。今回も順序尺度を間隔尺度と見なしているという問題点が指摘されうるので別のやり方で総合的な傾向を読み取るために、A: 遊びのタイプ(鬼ごっこ, 隠れんぼ) × B: 担当クラス(乳児, 3, 4, 5歳, フリー) × C: 反応カテゴリ(「よくある」「たまにある」「ない」)の3重クロス表に対する対数線型モデル分析を行った。表(7)に各モデル毎の情報基準値の計算結果を示してある。

表 7 5歳児クラスでの違反に関する対数線型モデル: 各モデルでの情報基準値									
	[ABC]	[AB][BC][CA]	[AB][AC]	[AB][BC]	[AC][BC]	[AB][C]	[AC][B]	[BC][A]	[A][B][C]
G2	0	5.618	43.962	94.900	8.359	130.801	44.260	95.198	131.099
BIC	0	-50.260	-67.794	25.052	-75.458	5.076	-95.434	-2.588	-22.564
AIC	0	-10.382	11.962	74.899	-15.641	94.801	4.260	67.198	87.099

これにより、条件付き独立モデル [AC][BC] が最もふさわしいモデルであると考えられる。この元で連関要因として取り出されている A: 遊びのタイプ × C: 反応カテゴリ, および B: 担当クラス × C: 反応カテゴリ, それぞれの元でのパラメータ推定値の Z 得点(標準効果得点)を示したのが表(8, 9)である。

表 8 5歳児クラス: A:遊びのタイプ × C: 反応カテゴリでのパラメータ推定値のZ得点 (SPE)						* < .05	** < .01
鬼・よくある	鬼・たまにある	鬼・ない	隠・よくある	隠・たまにある	隠・ない		
7.989**	1.235	-8.244**	-7.990**	-1.235	8.244**		

これによって、先の場合と同様にわざと捕まる違反行動は5歳児でも隠れんぼよりも鬼ごっこで起きやすいこと、そして5歳児に関して、相対的に乳児や3歳の担任は「ない」と見なす場合が多いが、5歳児の担任は「よくある」と判断する場合が多く「ない」と判断する場合が少ないことが示されている。この分析では4歳児の担任やフリー担任については特別な傾向は見られていない。

表 9 5歳児クラス：B：担当クラス×C：反応カテゴリーでのパラメータ推定値のZ得点（SPE） * < .05 ** < .01					
乳児・よくある	乳児・たまにある	乳児・ない	3歳・よくある	3歳・たまにある	3歳・ない
-1.219	-2.321 *	2.891 **	-2.171 *	-1.619	3.629 **
4歳・よくある	4歳・たまにある	4歳・ない	5歳・よくある	5歳・たまにある	5歳・ない
-1.588	0.718	1.052	3.421 **	1.744	-3.503 **
フリ・よくある	フリ・たまにある	フリ・ない			
1.621	0.409	-1.659			

4. 考察

本調査の結果、乳幼児保育の場では①どの年齢でも「鬼ごっこ」や「隠れんぼ」の取り組みが「ある」という回答が多く、0, 1, 2歳の乳児クラスでは単なる追いかけて遊びやいないいないばあ様の遊びをも含めて回答される場合があること、②鬼ごっこでわざとつかまる、あるいは隠れんぼで自らばあとするなどの違反行動について、3歳、4歳、5歳のクラス担任に限って分析した結果、「よくある」「たまにある」「ない」の回答に年齢差は認められなかった。これは遊び別に直接法で検討してもまた分散分析や対数線型モデルでの分析でもほぼ同様の結果であった。常識的な予測に反して、鬼ごっこでわざと捕まろうとする違反、隠れんぼでわざと見つかるようとする違反は3歳、4歳、5歳と年齢を重ねていくにつれて減少していくというわけではなく、年長5歳児クラスにおいても日常茶飯事であるらしいという結果である。遊び別に見るとこの種の違反行動は隠れんぼにおいてよりも鬼ごっこで「よくある」や「たまにある」の回答が多い傾向が見られている。③年長5歳児クラスについての回答では、やはりこの種の違反行動は隠れんぼにおいてよりも鬼ごっこで「よくある」や「たまにある」の回答が多い傾向が見られているが、担任クラスによる違いについては用いた検定手法によって多少結果が異なっていたが、「よくある」や「たまにある」という回答が5歳児クラス担任において特に多く、「ない」が少ないという点では一致していた。

以上の結果から、幼児期にこの種の違反行動は年齢とともに単純減少していくのではなく年長5歳児でも日常的に観察される傾向であるらしいと結論づけられよう。子どもたちは、年長5歳児になっただけで、何故かといういわば初歩的な違反行動をとり続けるのであろうか？これについては二つの説を取り上げることができる。

一つの説は、ごっこやルール遊びを役割表現という枠組みでとらえる説（代表的なのはE'likoninの「役割遊び」理論）からくるものである。こういう説では、ごっこという遊びの魅力は引き受ける役割のイメージの魅力とイコールである（「お母さん」という役割イメージの魅力に惹かれて「お母さんごっこ」が行われる）とされる。その上でルール遊びもごっこの延長上に位置づけて理解しようとする。この種の考え方の妥当性は、本研究の調査で質問紙の余白に「オニの役割が魅力的に思えるらしく、5歳児になってもオニになろうとしてわざと捕まろうとする場合があるようです」というような趣旨の自発的な記載がみられていたことにも関係しているだろう。

しかし、捕まることによって即オニへの道が開かれるのは鬼ごっこ、それも高鬼、色鬼など簡単に役割交替が生じる単純なタイプのその場合であり、ふやし鬼やため鬼あるいは集団対集団形式の鬼ごっこ、たとえば陣取りのような鬼ごっこには当てはまらない。本調査では鬼ごっこのタイプについ

ては特に問うてはいないのでこれ以上の言及は困難であるが、少なくとも隠れんぼにも通常は当てはまらない事柄であろう。隠れんぼでは参加者が二人という特殊な場合でない限りは見つかったからといってオニになるとは限らないし、また全員が見つからなければ役割交替も生じないのが普通である。本調査の結果では、先のような違反行動は確かに鬼ごっこの方が生起しやすいようであるが、それでも隠れんぼにおいてもほぼ同様の傾向が見られているのであるから、この結果全体をオニという役割へのあこがれのみによって説明することもまた困難なのである。特に隠れんぼに関しては5歳児クラスに関して次のような自発的記載も見られていた。

「隠れんぼなどしていてわざとでてくるのはオニになりたいというよりも、かくれている間ドキドキしてうれしくて自然に『ここだよー』と言ったり、出て行ってしまうのだと思います。うれしくてたまらないとどんな子どもでもそうだと思います」。

オニ役割魅力説だけでは充分でないとすると他に何が考えられるだろうか？加用（1984,1996）は以下のような遊びのパラドックスを挙げながら感情交流的対立成分の残存性という仮説を提起している。

一方で、2, 3歳以降の幼児期の遊びの発達段階としてはまずはごっこ遊びが現れ、その後にルールのある遊びが出現するというのは、Piaget, Vygotsky, Eli'konin 等過去の発達理論家たちの共通見解である。我が国でも、乳幼児保育の場で取り上げられる代表的なルール遊びといえば鬼ごっこと隠れんぼであるが、これが2, 3歳児には難しく、少なくとも4, 5歳児期にならなければきちんとした形では楽しめないことを示す研究も少なくない（土方・勅使, 1981; 神田, 1991; 田丸, 1991; 田中, 2005）。これもルール遊びがごっこ遊びよりも後続的に現れることを示す事実であろう。

しかし他方で、鬼ごっこ・隠れんぼはもちろんのことごっこ遊びですら出現していない乳児期（0歳, 1歳）に、鬼ごっこの重要な特徴である追う－逃げる行動、あるいは隠れんぼの重要成分である隠れる－探す行動が見られることは広く知られている。

たとえば、いないいないばあにおける隠れる－探す行動については Greenfield(1972), Bruner(1988), Parrot & Gleitman(1989) はじめ多数の研究が知られているし、我が国でもやまだ（1987）や伊藤（1991）の研究などが知られている。追う－逃げる行動を楽しむ傾向については「マテマテ遊び」という名称で保育実践に関わる形で報告されることが多いが（土方・勅使, 1981; 加用美代子, 1983; 神田, 1991）、家庭での日常生活的な観察例としてもたとえばやまだ（1987, p.197）は9ヶ月児の観察例として「（二階の廊下に出て行くのを認めた母が）階段が危ないので『ゆう君だめよ』と言うと、ケタケタと声を立てて笑い、逃げるようにハイハイしていく。『ゆう君だめだめ』と言うと、ニコッと笑ってさらに逃げていく・・・」などを紹介している。この種のいたずら的な逃げ行動は Reddy(1991) でも9ヶ月児の例として報告されている。

関連する現象としては自閉症児たちの遊びにも見ることができる。自閉症の子どもが一般にままごとのなごっこ遊び・ふり遊びを苦手としている点については「心の理論」関連で多数の指摘がある（Wulff, 1985; Leslie, 1987; Jarrold, 2003）ことなのでここで特に繰り返す必要もないと思われるが、しかし他方自閉症児の中には、先のやまだの挙げている例のような、追う－逃げる関係を楽しむ子どもたちがいるという報告も多い（巡, 1975; 平井, 1983; 加用美代子, 1983; 別府, 1999; 三宅・伊藤, 2002）のである。三宅・伊藤（2002）は、この種の遊びとくすぐり遊びや揺さぶり遊びをまとめて情動交流的遊びと名づけた上で自閉症児への治療プログラムの重要な一環として位置づけている。たとえば治療開始半年後の自閉症児 A の2歳6ヶ月時点での観察例によれば、「指導者が A 児に近づくと、声を

出して笑いながら逃げはじめる。何度か立ち止まって指導者を見た後、また笑いながら逃げ、追いかけて遊びを楽しむ」(p.4) とある。

ごっこの出現よりも遅れて可能になるはずの遊び(ルール遊び)の構成成分がごっこよりも早期にあるいは少なくとも同時期頃に出現しているというこのパラドックスをいかに理解すべきであろうか？

この問題を考える上できわめて示唆的なデータを報告しているのは田丸(1991)である。彼女は3歳、4歳、5歳児を対象に子ども3人と大人1名で鬼ごっこをするという設定で各年齢3組、各々4回のセッションを施行して、幼児の鬼ごっこ行動の特徴分析を行っている。彼女の示したデータで非常に興味深いのは、コになった子たちがいつの時点で逃げ始めるかを分析した部分である。それによると、5歳児たちの多くはオニが数を数え始める前に逃げ始め、4歳児たちはオニが数を数え始めてから逃げ始める傾向があるという。これに対し3歳児たちの圧倒的多数はオニが数え終えて実際に追う行動を示し始めてからその時はじめて逃げ始める、という。

この田丸のデータは、鬼ごっこを楽しむ子どもたちの行動メカニズムが3歳児と4、5歳児の間で異なっていることを示すものであり、4、5歳児たちは「オニに捕まらないようにする」という遊びのルールが規定する目標意識にそって行動しようとしているのに対し、3歳児の場合は、追われるから逃げるという相補的対行動に近い形で振る舞っているように見える。加用(1984, 1996)は、これらの事実を発展的に理解して、前者の行動メカニズムを目標意識対立、後者を感情交流的対立ととらえて区別した上で、後者の成分は実は年長5歳児にも残存しているのではないかという仮説を提示している。この仮説によると、一般に鬼ごっこでは二つの対立成分が矛盾し合いながら同居しており、オニとコは、目標意識対立としては「捕まえたい」「捕まらないようにしたい」という関係にあるが、感情交流的対立としては互いに「相手が逃げるから追いかけてなくなる」「追われるから逃げたくなる」という関係も同居している。そのためにオニはコを捕まえたいがコには逃げてもらいたい、コの方は捕まりたくはないがオニには追いかけてもらいたい、という矛盾関係に入ることになる。この図式は隠れんぼにも当てはまり、オニはコを見つけたいが隠れてはもらいたい、コの方は、見つかりたくないけれど探してもらいたいという矛盾関係にある、という。こういう矛盾同居がさらに発展すると、やがてはオニをからかってつかまる寸前のスリルを味わうという高度な楽しみ方へとつながっていくのであろうと考えられる。

2つの関係がこのように矛盾しながら同居しているのが鬼ごっこや隠れんぼなのであるが、3歳児ではまだまだ乳児期由来の感情交流的対立の成分が優勢であり、4歳から5歳へと次第に目標意識対立の成分が強まっていくのではないかと、田丸(1991)のデータに表れた年齢差はこのことを反映しているのではないかと考えられよう。

もしもこの説にそれなりの妥当性があるとすれば、年長5歳児においても感情交流的対立の成分が残存しているのであるから、コになった子どもが「オニに捕まりたくない」という目標意識対立の中にいたとしても、遊びの進行過程において実際にはオニに追いかけてもらえないという事態が続けば、欠落した感情交流的成分を補おうとして、自ら捕まろうとする、という行動に出たとしても不思議なことではなく、この種の違反行動が「よくある」あるいは「たまにある」という保育士たちの回答となって現れることは十分に考えられよう。これは隠れんぼにも当てはまるであろう。

わざと捕まろうとするという違反が5歳児でも日常的に観察されるという事実への説明として考えられる第一の仮説はオニ役割魅力説であったが、第二の仮説は感情交流的対立成分の残存性である。二

つの仮説のうち果たしてどちらが有力であるのか。この種の違反行動は隠れんぼにおいてよりも鬼ごっこにおいて見られやすいという本調査で確認された事実からすればオニ役割魅力説が有力であるが、捕まることが即オニ交代を意味しない隠れんぼにおいても違反行動が無くならないという事実からすれば残存性仮説も有力であり、おそらくは両方のメカニズムが関与しているのであろう。しかし、残存性仮説をさらに検討するには本研究のデータだけでは不十分である。ここから先は、該当違反行動の生起場面についての詳細かつ多数の組織的観察にもとづいて、わざと捕まる、あるいは自らばあとなる、という行動が実際にはどういう場面で出現しているかが検討されなければならない。感情交流的対立成分の残存性仮説からすれば、そういう行動はオニに追われなくなったとき、あるいは探されなくなったときにこそ出現しやすい、ということになるのであるが、さて実際はどうであろうか？加用他（1981）にはそれらしく思える例の報告があるが断片的なものであり、組織的な検討は今後の課題である。オニをからかうスリルを味わうという楽しみ方の出現メカニズムの解明と併せて検討していきたい課題である。

文 献

- 別府 哲. (1999). 挑発行為を頻発した自閉症幼児における他者理解の障害と発達. 発達心理学研究, 10, 88-98
- Bruner, J.S. (1983). 乳幼児の話しことば (寺田晃・本郷一夫, 訳, 1988) 東京: 新曜社 (Child' talk: Learning to Use Language. Oxford University Press.)
- Cole, P. (1986). Children's spontaneous control of facial expression. Child Development, 57, 1309-1321.
- E'likonin, D.B. (1960). ソビエト・児童心理学 (駒林邦夫訳, 1964) 東京: 明治図書
- Greenfield, P.M. (1972). Playing peekaboo with a four month old: A study of the role of speech and nonspeech sounds in the formation of a visual shema. The Journal of Psychology, 82, 287-298
- 土方弘子・勅使千鶴 (1981). 乳幼児の遊び 京都: ミネルヴァ書房
- 平井信義 (1983). 自閉症児の遊戯療法 東京: 東京書籍
- 伊藤良子 (1991) 「いないいないばあ」は何故面白いのか. 山崎愛世 (編) 遊びの発達心理学 (pp.11-28) 東京: 萌文社
- Jarrold, C. (2003) A review of research into pretend play in autism. Autism, Vol. 7(4), pp.379-390
- 神田英雄 (1991) 追いかけて遊びからオニごっこへ 山崎愛世 (編) 遊びの発達心理学 (pp.29-63) 東京: 萌文社
- 加用文男・田丸尚美・林みずき・鈴木淳子・小田昭 (1981). 幼児のルール遊びにおける違反・逸脱・インチキ 心理科学 5(2), 19-28
- 加用文男 (1984) 「役割遊び」理論の検討 心理科学 第9巻第1号 pp.1-9
- 加用文男 (1991) 子ども心と秋の空 ひとなる書房
- 加用文男 (1996) 対立のある交流を豊かに楽しむ 鬼ごっこ・ルール遊び (「現代と保育」編集部編) ひとなる書房 164-172
- 加用美代子 (1983) 幼児期の遊び 子どもの遊びと発達 (河崎道夫編著) ひとなる書房 pp.95-135
- 河崎道夫他 (1979) 幼児におけるルール遊びの発達—その1 仮説構成の試み— 心理科学 第2巻第

1号 39-46

河崎道夫 (1984) ルール遊び研究への一視点 心理科学 8巻1号 P.1-8

Leslie, A.M. (1987). Pretence and representation: The origins of "theory of mind". Psychological Review, 94, 412-426

Lieberman, J.N. (1977). Playfulness: Its relationship to Imagination and Creativity. Academic Press, Inc.

巡 静一 (1975). 障害児と遊び 京都: ミネルヴァ書房

三宅康将・伊藤良子 (2002). 発達障害児のコミュニケーション指導における情動的交流遊びの役割 特殊教育学研究, 39(5), 1-8

西川由紀子 (2003). 子どもの自称詞の使い分け: 「オレ」という自称詞に着目して 発達心理学研究 14, 25-38

Parrot, W.G. & Gleitman, H. (1989). Infants' Expectation in Play. 'The Joy of Peekaboo. In C.E. Izard (Ed.) Development of Emotion-Cognition Relations (pp. 291-311) Lawrence Erlbaum Associates Ltd.

Piaget, J. (1930). Le jugement moral chez l'enfant. Delachaux et Niestle, Neuchatel et Paris.

Piaget, J. (1945). La formation du symbole chez l'enfant, imitation, jeu, et reve; image et representation. Delachaux et Niestle, Neuchatel et Paris.

Reddy, V. (1991). Playing with other's expectation: Teasing and Mocking about in the first year Andrew Whiten (ed.) Natural theories of mind: Evolution, development and simulation of everyday mindreading (pp. 143-158). Oxford Blackwell.

Saarni, C. (1984). An observational study of children's attempts to monitor their expressive behavior. Child Development, 55, 1504-1513.

西條剛央 (2004). 母子間の「離抱」に関する横断的研究: 母子関係を捉える新概念の提唱とその探索的検討 発達心理学研究 15, 281-291

田丸尚美 (1991). 幼児の遊びにおける役割関係の理解—鬼ごっこ場面の発達の検討 教育心理学研究, 39, 341-347

田中浩司 (2005) 幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達 発達心理学研究 16, 185-192

Taylor, M, Cartwright, B., and Carlson, S.M. (1993). A Developmental Investigation of Children's Imaginary Companions. Developmental Psychology, 29, 276-285

やまだようこ (1987). ことばの前のことば 東京: 新曜社

Vygotsky, L.S. (1933) 子どもの精神発達における遊びとその役割 児童心理学講義 (柴田義松・森岡修一, 訳, 1976, pp. 23-48) 東京: 明治図書

Wulff, S.B. (1985) The Symbolic and Object Play of Children with Autism: A Review. Journal of Autism and Developmental Disorders, Vol. 15, No. 2, pp. 139-148